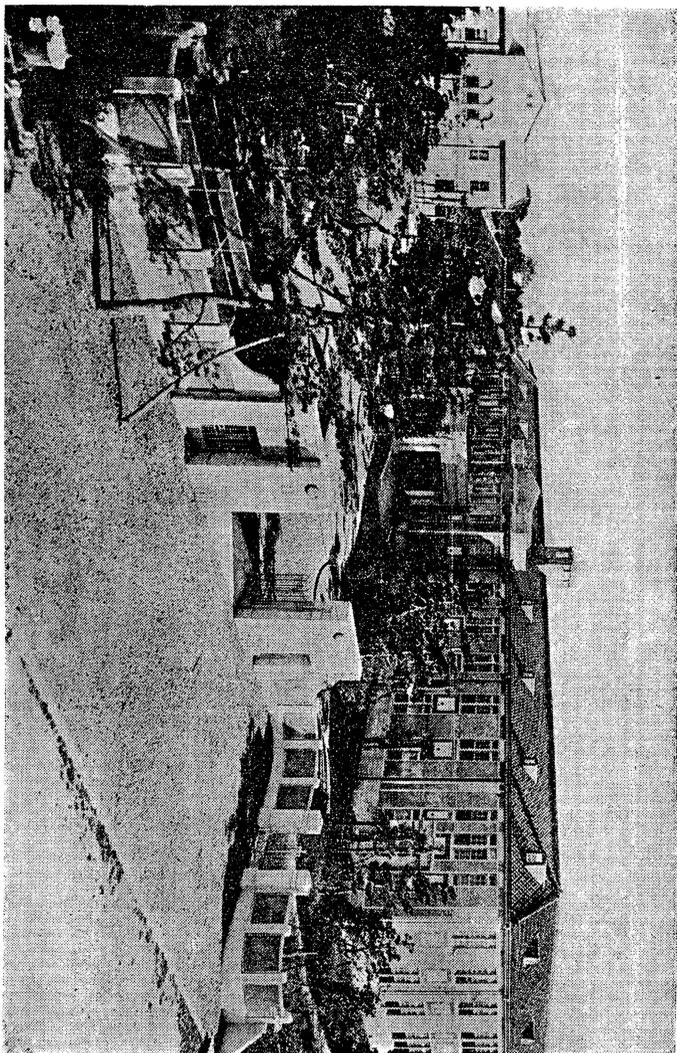


富山高等學校概要

(昭和十一年四月現在)



校舍正面

富山高等學校々歌

相馬御風氏
小松鞆輔氏
作曲

一、嗚呼玲瓏の天高く

白雪銀と輝ける

大刀の高嶺を仰ぎつゝ

聲さわやけき野を歩む

若き學徒の胸に湧く

清き想ひを誰か知る

二、朔風砂塵を吹き捲きて

怒濤天地を揺する時

有磯の海の岸に立ち

癡思の姿憐乎たる

若き學徒の身に宿る

強き力を誰か知る

三、越の國原雪深く

地に人掃の絶ゆる時

くろずむ壁に燦として

不壞の眞理の威を示す

北斗の星ぞわが光

あゝそが下にわれ等あり

四、神江の水洋々と

流れて止まぬ世の進み

若きわれらが擔ふなる

使命は重しいざごもに

反省進取協調の

旗標の下に手をとらん

富山高等學校概要

(昭和十一年四月現在)

目次

一 沿革	一頁
二 組織と施設	一七
三 教授訓育上の実施要項	二四
四 教育方針	二七
五 職員	三二
六 生徒	三八
七 卒業生 (大學進入狀況)	四二
八 經費	四六
九 敷地並校舎	四七

一、沿革

創校の由緒

大正十二年五月十五日、馬場正治氏親權者、馬場はる子女史から、富山縣知事伊東喜八郎氏に宛てた、左記寄附願こそは、實に我が富山高等學校誕生の胚胎であつた。

寄 附 願

皇太子殿下今秋御婚儀被爲舉候趣 皇室ノ御繁榮ハ勿論國家ノ一大御慶事無涯奉祝賀候就テハ御成婚奉祝記念事業トシテ
七年制高等學校設立願上度金壹百萬圓也ヲ寄附シ以テ君國報恩ノ微意奉表致度存候間願意御許容被下可然御施設被下度御願
申上候也

大正十二年五月十五日

富山縣上新川郡東岩瀨町

馬場正治親權者

馬 場 は る 子

富山縣知事 伊 東 喜 八 郎 殿

其の後同年七月二日更に左記寄附願の示す如く、金參拾四萬圓を追加寄附された

寄 附 願

皇太子殿下御成婚奉祝記念事業トシテ曩ニ縣立七年制高等學校設立費金壹百萬圓寄附出願仕置候處今回該豫算御内示ニ據
レバ同校經常費支辨用基金貳拾六萬圓ト相成所期額ニ達セザルハ甚ダ遺憾ニ被存候ニ付右基金ヲ五拾萬圓ト致度不足額貳拾

四萬圓並ニ同校職員海外留學費基金トシテ金拾萬圓併テ金參拾四萬圓更ニ寄附仕度候間前願ト共ニ御許容相成度御願申上候也

大正十二年七月二日

富山縣上新川郡東岩瀨町

馬場正治親權者

馬場はる子

富山縣知事 伊東喜八郎殿

こゝに於て縣は七拾四萬圓を建築設備費に、五拾萬圓を維持基金に、拾萬圓を外國留學基金として本校設立の計畫を立て、同年七月十四日臨時縣會を召集して議るや、滿場一致原案に賛成し、感謝文を議決して馬場家に呈した

敷地の決定

我等が學園の敷地を何處に相すべきか、これについては吳羽山麓、富山市等、二、三の候補地を挙げられたが種々の條件を参照した結果、現在の富山縣上新川郡大廣田村蓮町二十二番地に決定されたのである。

場所は富山市の北方一里強、富山市から東岩瀨に通ずる縣道、所謂岩瀨街道に沿ひ、塵寰を離れた小高い土地で、其の總坪數一萬七千四百五十四坪三合七勺、東には立山連峰が其の偉容を碧空に横へて四季不言の啓示を垂

れ西には洋々たる神江の流れが音もなく海に注ぎ、風を孕んで上下する、白帆の點々たる眺めも長閑に、時には白鷗群をなして河面を掠め飛ぶなぎの詩景を展開し、眼を北に轉すれば有磯の海は千里浩蕩の波を閃かして、晴れた日には遙か彼方に能登半島の模糊たる影を指點するこゝが出来る。

校舎建造の開始

大正十二年十月十二日附を以て、富山縣上新川郡大廣田村蓮町二十二番地へ本校設置の件が文部大臣から認可せられたので、いよ／＼校舎の建造に取掛るこゝになつた。

設計については富山縣建築技師竹森一之氏主として之に當り、當時既に建設せられて居た、東京、武藏、甲南の各七年制高等學校を參考とし、建築顧問文部省書記官赤間信義氏同省技師柴垣鼎太郎氏を初め、全國各高等學校長等の意見を徴したが、殊に當時の新潟高等學校長八田三喜、學習院教授岡田正之兩氏の意見を參考するこゝろが多かつた。大正十三年六月四日敷地構成を終へ、こゝに校舎の建造が始まつたのである、同年度に着手したのは本館教室と生徒控所、圖書館等であつた。

學則の發布と校長の補任

大正十二年十月十八日富山縣令第六十三號を以て本校學則が發布せられ、同年十一月十五日縣は從四位勳四等元學習院教授南日恒太郎氏に本校校長事務取扱を囑託し、同年十一月二十四日本校創立事務所を富山縣廳内に置いた、同年十二月五日南日恒太郎氏の本校校長事務取扱を解き、同時に文部大臣は同氏を本校校長に補任した。南日校長は久しく華胄の教育に従事して令名顯る高く、其の學殖は英文學界に重きをなし資性溫雅高潔にして然も本縣出身の大先輩であるので、本縣最高學府たる本校校長としては洵に其の人を得たものと云つてよい。

開校第一年

開校第一年本校が創立されて第一回の入學試験は大正十三年三月十六日から三日間富山縣立神通中學校の校舎を借りて行はれた。其の結果、五百二十五名の中から選ばれた、八十名の尋常科第一學年生は、全年四月十八日から、富山縣上新川郡東岩瀨町立尋常高等小學校の一部、今は焼けて終つて舊觀はないが、校舎の南端の二階の四室で開校第一年の授業を受けることゝなつた。當時南日校長の下に、久保、白澤、木枝、安藤の四教諭と二木津林の兩書記が勤務した。

校章と制服

本校の校章は故南日校長が當時神通中學校教諭であつた故宇田教諭に依頼して作製し大正十三年四月制定され

たものである。校章の大體の形は我が校庭から真正面に仰がれる立山連峰の雄「劍」を表し其の三つの稜は我等學徒の探究する、眞、善、美を象徴するもので我が學園の燦たる理想遺憾なくこの校章に輝いてゐる。制帽は高等科には頤紐はないが、尋常科には之を附し、頤紐の止釦の校章は高等科は銀色であるが、尋常科は金色である。

東宮殿下侍從御差遣の事

本校が第一回の生徒を收容して、こゝに學園としての力強い第一歩を踏み出した年、其の光榮ある門出に、いやが上にも光榮ある歴史を添へたのは、東宮殿下侍從御差遣の御事であつた。大正十三年十一月八日東宮殿下には北陸行啓の砌侍從牧野貞亮子爵を未竣工の校舎に御差遣遊され親しく視察せしめられ給ふた。荒壁も乾かぬ校舎に、皇太子殿下より特に御使を賜つたことは恐らく絶無の例であり、破格の光榮とするこゝろである。

新築校舎へ移轉

昨年第一着手に建築に取掛つた本館教室、生徒控所、講堂はいよゝゝ竣工を告げたので、大正十四年三月五日東岩瀬町の假校舎を引拂つて新築校舎に移轉した。

馬場家更に寄附追加

本校の創設費は曩に馬場家の寄附額で十分であるこゝ文部當局でも折紙を附けたのであつたが、建築進歩に伴う

て設備上の不備を發見するこゝが尠なくなつたので、馬場家に於ては願ふ之を遺憾とせられ更に左記のやうな追加寄附の出願をせられて、蒸汽煖房及び水道の新設費に機械器具の不足費に充てられることになつた。

寄 附 願

曩ニ富山高等學校創設費トシテ金百參拾四萬圓寄附出願仕候處維持金及留學基金ヲ控除シテ設立費七拾四萬圓ヲ以テシテハ設備上遺憾尠カラズ之ガ完成ヲ期スルニハ計九拾萬圓ヲ要スル趣テ承仕候依テ此際特ニ不足額金拾六萬圓ヲ追加シ寄附總額ヲ金百五拾萬圓ト致度條間御許容相成度此段御願申上候也

大正十五年十一月十八日

富山縣上新川郡東岩瀬町

馬場正治親權者

馬 場 は る 子

富山縣知事 白 上 佑 吉 殿

校 歌 の 制 定

昭和二年春、校歌制定の企を起し、最初は全校生徒に向つて懸賞募集を試みた。其の結果應募者は五名あつて其の壹等當選者は文科三年生徒渡邊年應であつた。小林教授は其の應募作品全部を携へて、新潟縣糸魚川町に居住の斯道の大家相馬御風氏の門を訪れ、之等を參考資料として新に氏の作製を請ひ、其の結果今日の第一校歌の歌詞を得たのである。更に作曲を當時の學習院教授小松耕輔氏に依頼し、同年七月八日、の校歌は制定せ

られたのである。前に當選の渡邊の作は第二校歌として採用せられ、同じく小松氏の作曲を得ることになった。

校舎建造の完成

大正十三年工を起して以來、校舎の建造は着々進捗し、大正十四年四月二十五日本館教室、生徒控所、圖書館、等先づ竣工し、同年十二月十六日武道場、特別教室、書庫、大正十五年二月二十三日弓道場、同年五月十四日寄宿舎及び附屬建物造物、同年十月十日倉庫、雞庫、物置、銃器室等、昭和二年七月三十日講堂、表門、通用門等、同年十二月十五日汽罐庫、煖房設備、給水池等、昭和三年一月二十四日排水用井戸引續き竣工し、同年三月二十日の温室、雨雪天體操場、生徒集會場の竣工を以て最後とし、こゝに校舎の建造は滞りなく完成したのである。其の建坪二千六百九十四坪一合延坪三千五百四十二坪七合一勺、建築費總額六拾四萬七千貳百八拾四圓九拾貳錢の巨額に上つてゐる。

南日校長の卒去

いよ／＼來る秋には開校の式典を擧げ得るこいふ喜びに、職員生徒共に大童になつて準備して居た昭和三年七月二十日、全校敬愛の的たる南日校長は、岩瀬海岸に於いて水泳中、心臟麻痺のために波間に沈まれ、百方手段を盡したるも其効なく、遂に英魂空しく天に歸られた。

南日校長の卒去せらるゝや、即日柴山教頭は校長事務取扱を命ぜられ、南日校長の葬儀は富山市外山室村長江の自邸に於て校葬を以て行ひ、職員總動員でこれにあつた。我等の慈父の如く慕うた南日校長は、かくて北邙一片の煙も消え去られたのである。然し校長の高潔圓滿なる指導精神も、創立以來の偉大にして献身的なる業績も、永へに生きて居る。

柴山校長の就任

南日校長卒去と同時に本校校長事務取扱を命ぜられた柴山槐郎氏は、越えて同年八月十六日、本校校長に補せられた。柴山校長は大正十四年二月六日本校教頭として着任以來、故南日校長を助けて、拮据經營、我が學園を今日あらしめた人である。今や故南日校長の後をついで、其の遺業の完成に當られることになつたのである。

御眞影奉戴

昭和三年十月九日、柴山校長、二本書記、上京して、文部省に於て 天皇、皇后兩陛下の 御眞影を拜受の上、翌朝歸校したので、職員生徒一同校門に堵列して御奉迎申上げ、豫て齋み淨めた講堂内奉安庫に安置し奉つた。

開 校 式

大正十四年三月五日、大廣田の新築校舎に移轉以來、我が學園の外形内容共に、充實整頓し、今春を以て尋常科第一回の修了生も高等科へ進んだので、いよゝゝ昭和三年十月十七日の佳辰を卜して開校の祝典を舉げるこゝになつた。

之に關聯して行はれたる行事の主なるものは次の如くである。

- | | | | | |
|---------|-------|------|-------|--|
| 一 開校式典 | 十月十七日 | 午前十時 | 講堂 | |
| 二 講演 | 十月十七日 | 午後 | 講堂 | 田部隆次氏 |
| | | | | ヘルン文庫について |
| 三 寮生劇 | 十月十七日 | | 弓道場 | |
| 四 提灯行列 | 十月十七日 | | | 校門―東岩瀬町―馬場氏邸―岩瀬港―(電車)―富山驛―西町―堤町―東四十物町―中町―總曲輪―學校長邸―縣廳前―市役所前 |
| 五 音楽會 | 十月十八日 | | 縣會議事堂 | |
| | 十月十九日 | | 講堂 | |
| | | | | 東京音楽學校教授及生徒約百名演奏 |
| 六 映畫大會 | 十月十九日 | | 富山松竹館 | |
| 七 學術講演會 | 十月二十日 | | 縣會議事堂 | |

自由主義の功績と將來 河 合 榮 次 郎 氏
日本の疾病 石 川 日 出 鶴 丸 氏

八 陸上競技大會

十月二十一日

本校グラウンド

開 校 記 念 碑

我が學園の開校を永遠に記念する爲、開校式と殆んど同時に、開校記念碑が建立されたが、其の費用の全部は富山縣中新川郡滑川町加藤金次郎氏の篤志によつたものである。

場所は本校の前庭、立關に向つて右手の、棕櫚や松の植込の中で、全部御影石で造り、臺石には、創立當時富山縣知事であつた伊藤喜八郎氏の揮毫にかゝる「記念碑」の三文字を彫り、碑石には長方形の青銅板を嵌めて、本校助教授中島千松氏の撰文揮毫にかゝる碑文が記されてゐる。

故南日校長の胸像成る

故南日校長追慕の情は、日に増し月に濃くなつて、茲に於て我が學園の一角に先生の胸像を建設して、日夕其の溫容を仰ぎ、以て先生の御人格を永遠に追憶したいとの議が、自らにして職員生徒の間に持上つた。そこで、

昭和四年三月本校校友會、同窓會の發起で生徒父兄、職員の贖金を募集し、約參千圓を得たので、其の製作を當時の東京美術學校教授朝倉文夫氏に依頼した處、同氏は快く承諾の上最高の藝術的熱情と苦心を傾けて製作を完成したのであつた。

胸像は本校の前庭、講堂を背景にして西向に建てられた、臺は長方形の御影石で高さ六尺三寸、前面には「南日恒太郎先生」の七文字を、背面には本校助教授中島千松氏撰の背陰記を彫り、胸像は青銅で高さ二尺五寸。流石一代の巨匠の作ほざあつて、其の前に立てば、温乎として玉の如き御容貌の中に凜乎として侵すべからざる氣品が溢れて居て、御生前の先生に眼のあたり接するが如き思ひが沸いて來る。

除幕式は、昭和四年十月十六日に行はれ、先生の御未亡人を始め御遺族の方々が參列されて、今更ながら先生追慕の情を新にしたのであつた。斯くて不言の御雄姿は富高精神の象徴の如く、永遠に學徒渴仰の的となつて無限の感化を與へつゝあるのである。

蜷川校長の就任

昭和六年三月三十一日柴山校長病氣の故を以て退職せらるゝや、同日附を以て富山縣師範學校長蜷川龍夫氏が本校校長に輔せられた。蜷川校長は嘗て長く奈良女子高等師範學校に教授となり、大正十年富山縣師範學校長拜命以來今日に至つた人で、故南日校長とは師弟の間柄である上、共に本縣出身である。

校旗の制定

昭和七年二月、上海事變當時、出征兵士歡送の爲め、數次他校ミ行動を共にしたが、本校だけがその中心なる校旗がなく、頗るこれを遺憾とした、この事が直接動機となり、蟄川校長の盡力によつて遂に校旗の制定を見るに至つたのである。

創立十周年

昭和八年に至つて我が學園が馬場家の篤志によつて創立以來すでに十年の星霜を閲し其の間に卒業生を送り出すに六回、其の數五百六十九名に及んで、既に大學の門を出た人達は四散して各地に活動し、いやが上に母校の名聲を高からしめつゝある。

これ祝賀するために昭和八年十月十六日午前十時より講堂に於て行はれたる十周年記念式を中心として、各種の行事及事業が行はれた。其大要は次の如くである。

一、記念式並に諸式

記念式 昭和八年十月十六日午前十時から講堂にて舉行、鳩山文部大臣、齋藤本縣知事、馬場正治氏以下來賓六七六名其他職員卒業生父兄生徒參列。先づ君が代の合唱で式が始まり、蜷川校長の式辭に次いで鳩山文部大臣、齋藤縣知事、馬場正治、松井京都帝國大學總長、高橋全國高等專門學校長總代、鹿熊縣會議長、田上父兄總代、金田卒業生總代、岩野生徒總代等の祝辭があつて、校歌合唱後、午前十一時半閉式。式後引續き感謝式を舉行し、馬場正治氏に對し、父兄代表米澤元健氏から感謝文を贈呈した。正午、來賓、父兄、卒業生全部を祝宴場に充てた屋内体操場に案内し、祝宴會を開催した。

慰靈祭 十月十七日午前十時から講堂で、故南日校長始め本校創立に直接關係ある人士、職員、生徒、卒業生中の物故者四十二名の慰靈祭を行つたが、遺族多數參列の上、嚴肅裡に故人を追想した。

表彰式 同日午前十一時、本校父兄會に依り會議室に於て本校勤續十年の職員菊池勘左衛門、安藤敏郎、小西清正、蒲田常太郎、荒木得三、二本勝邦、藤木辰助の七氏に對し感謝狀に添へて記念品を贈り、其の功勞を感謝するところがあつた。

二、祝賀行事

陸上大運動會 十月十五日午前八時から正午まで本校運動場にて開催。

寮公開 十月十五日から三日間、毎日午前九時から午後四時まで公開。

展覽會 十月十五日から四日間、毎日午前九時から本校教室にて開催、美術展覽會は本校職員、生徒の作品、縣下各學校生徒の作品の外、本邦に於ける明治大正期の畫壇に於ける代表的作品、日本畫、荷花水禽圖(川端玉章)經政詣竹生島圖(小堀勲晋)雲の峰、夏の月、(寺崎廣業)の四點、洋畫、菊、(黒田清輝)初冬晚暉圖(岡田三郎助)渡頭の夕暮(和田英作)ローマの池(藤島武二)の四點を陳列し、山岳展覽會亦得難き參考品を多く宛め、生徒の寫眞展覽會は其の製作を發表した。提灯行列 十月十五日午後六時から、折酒の降雨にめげず校友會主催の提灯行列を舉行。岩瀬にては馬場家に敬意を表し、更に富山驛前に集合、櫻橋、西町、堤町、中教院通り、中町、總曲輪を経て、縣會議事堂前にて解散。

音樂會 東京音樂學校長栗杉嘉壽氏の引卒の下に同校教官福井直俊、大塚淳、平原壽恵子、中村淑子の諸氏外生徒白四十

餘名の大規模的な地方稀に見る演奏會。十月十六日午後七時から縣會議事堂で一般聴衆に、翌十七日午後二時から本校講堂で職員、生徒、父兄に鑑賞せしめた。

演劇鑑賞會 寮生主催の劇は十月十五日講堂で、高等科圖書雜誌部主催の劇は十月十七・八の兩日午後六時から新富劇場で開催した。巡會講演會九月三十日魚津小學校、十月六日滑川寺家小學校、同十三日高岡水波佛教會館、同十四日富山市總曲輪小學校にて講演會を開催した。

祝賀園遊會 十月十八日、本校前庭で校友會の園遊會を開催した。おでん・汁粉・お菓子・果物等食べ放題の模擬店、加ふるに職員生徒の餘興、八尾町坂井氏の斡旋にかゝる本場の八尾の小原節其他の餘興があつた。

松岡洋右氏講演會 十六日の記念式當日の豫定が氏の都合のため延期、十一月十一日講堂にて開催した。南控所に第二會場を作つてラウドスピーカーを裝置し本會場にあふれた聴衆を満足せしめた。

三、記念事業

富山高等學校大日岳ヒユツテ 大日岳ヒユツテ建設後後會諸氏の篤志によつて、大日岳と大日岳との中間の鞍部にヒユツテを建設し、昭和八年七月十日竣工。

体育設備 馬場正治氏の篤志により、体操・柔道・劍道・弓道・水泳の各体育設備を充實した。

國旗掲揚塔 本校生徒父兄大連在住の瓜谷長藏氏の篤志にて、校庭に高さ六十尺の國旗掲揚塔を建設し、十月十五日最初の掲揚式を舉行し、雨後毎週月曜始業前に掲揚式を行つてゐる。

記念植樹 職員生徒の献金により、校庭各所に百合樹・椎木・アカシヤ樹・ヒマラヤ松等五百餘株を植樹した。

富山高等學校十年史 本校開校以來十年の歴史及び現状を、菊版本文二百四十二頁、附表百二十頁に編纂し、開校式當日出席の來賓及び生徒父兄に頒布した。

富山高等學校圖書目錄 昭和八年十一月末現在の本校圖書館藏書の目錄を菊版五百五十一頁に印刷全國高等學校及び關係

各圖書館へ寄贈した。

八雲圖書館 馬場正治氏の篤志により、本校現圖書館の東南に近接し、鐵筋コンクリートの日本式を加味した、雅致ある平屋造一棟を建設し、本校所藏のヘルン文庫並に小泉八雲（ラフカディオ・ヘルン）の遺品を陳列する豫定を以て、昭和八年十月十七日地鎮祭を行つた。

富山高等學校臨海研究所 本校同窓會員並に本縣氷見町有志の篤志により、氷見地方に本校臨海研究所を設くることとし、實驗所の設計は本校卒業生寺石工學士に之を依頼した。

教官優遇と設備充實

十周年を劃期として、創校の大精神を追念し、職員生徒共に、更に學園の向上發展の爲に、努力の熱意を高め、つゝあた時、創設費其他各種の寄附によつて、從來本校發展のために、多大の援助を與へられた馬場正治氏は、昭和九年十一月、更に金拾萬圓の寄附を申出られ、これに依つて、教官の待遇向上と、設備の充實を圖られることとなつた。左記寄附願により、馬場氏の意圖が明かにされる。

寄 附 願

富山高等學校が創立以來歳ト共ニ其成績ヲ舉ゲ今ヤ全國高等學校中優位ヲ占ムルニ至レルコトハ誠ニ御同慶ニ堪ヘザル所ニ有之（中略）教育ノ要諦ハ優良教員ヲ招聘シ施設ヲ完全ニシテ克ク其ノ研究ヲ促進スルヲ以ニ其ノ尤トナスベク（中略）本校が縣立高等學校トシテ存置セラルル限り左記金額（拾萬圓ヲ各年ニ分割）ヲ寄附シ以テ聊カナリトモ本校教育ノ改善向上ニ資シ度相考申候而シテ本寄附金ハ第一教員平均俸給ヲ少クトモ富立高等學校ニ於ケルト同等以上トナスコト第二俸給支

給上生ズル殘餘ハ設備充實内容改善ニ充當スルコトヲ以テ目的トスル次第ニ有之候間右願意相叶ヒ候様可然御取計相煩度御願申上候

東東市牛込阪若宮町四〇

馬場正治

昭和九年十一月九日

富山縣知事 齊藤 樹殿

八雲圖書館の落成

十周年記念事業の一こし企られた。八雲圖書館の建築は、多少豫定より遅れたが、昭和十年五月十日、建築費寄附者馬場正治氏、其他關係者を招いて、落成式を擧げるこゝを得た。この建築は、松江市の八雲記念館の設計者、山口蚊象氏の考案に、若干の修正を施したもので、耐震耐火の鐵筋コンクリート建であり、貴重な文献を永久に護るこゝを得るのみならず、文豪ヘルンを偲ぶにふさはしく、日本趣味を加へた頗る雅致に富んだものである。今や館内には、文豪遺愛の圖書、神國日本の原稿、及ヘルン關係の參考文献が、陳列保存され、我が學園に對する無言の啓示になつてゐるばかりでなく、ヘルンを思慕する内外人士の來訪、次第に多きを加えつ、ある現狀である。

一、組織と施設

校務

本校の教育事務は學校長の下に教頭と生徒主事とがあり、教頭は主として教授方面を、生徒主事は主として訓育方面を掌理する。校長事故あるときは教頭その事務を代決するのであるが、普通は教授に關しては教頭は直接に校長の命を受け、訓育に關しては生徒主事が直接校長の指揮を仰いで學校の教育事務を統制して行くのである。各分課事務にあつては庶務課と會計課は校長に直屬し教務、圖書の二課は教頭に、生徒寮務の二課は生徒主事に屬してゐる。而して現在では、教頭は教務課長を兼ね生徒主事は生徒課長を兼ねてゐる。各課には課長の下に教官たる課員と、書記、書記補、雇等の事務員を置いて所管の事務を執掌する。本校に於ては尋常科、高等科共に同一建物内に於て教育してゐるために事務を分割して行ふことなく、たゞ或る課によつては教諭たる課員が便宜上主として尋常科の事務を分割してゐることもある。教授、訓育、その他學校全般の事に關する事項は、凡て教官會議に附議せられる。特に必要ある場合又は全教官を集め得ざるときは評議員會が開催せられる。學科の統一、改善のため、各學科に學科主任があつて教頭に屬し學級主管は、教頭、生徒主事督勵の下に各學級高級の事に任ずる。本校には生徒指導上、文部省が推獎し、多くの高等學校に於て實施されつゝある指導教官制度を採用してゐない。教授訓育の實際に當つては教官一同熱心に生徒の誘掖に任じ、特に學級主管が第一線に立ち指導斡旋し、生徒も亦之に信賴する風あるが故に、單一なる學級主管制度で十分訓育の徹底を期し得られ、從

つて格別指導教官存置の必要を感じない。故に本校に於ては學級主管が他校に於ける學級主管と指導教官との兩者の責務を兼任してゐることを謂つてよい。

一 一般施設

研究室 本校教官の爲めに、各學科毎に研究室を設け、當該學科に必要な圖書及び教具を備へて教官の研究に資し、兼ねて學科教官相互の授業上の連絡と生徒の指導に便ならしめて居る。其中、英語研究室は、時々英語研究會又は科外講議等にも利用されてゐる。

固定教室 本校は創立當初數年間は學科教室組織になつて居て、生徒は固定教室を持つて居なつた。即ち英語研究室の附近に英語教室があり、獨逸語研究室に隣接して、獨逸語教室があること云ふ風であつた。昭和五年度より現在の固定教室制に變更することになつた。

尋常科主管室 尋常科主管も受持學科により別々な研究室に分れてゐたのであるが、尋常科の授業と訓育を一層徹底せしめなければならぬ必要を認めたので、昭和七年八月より尋常科主管八名此の室に席を並べて、任務に就くことになつた。これ迄は尋常科生徒に關し、主管が意見の交換をなさうとする場合には、一定の時日を定めて會合しなければならぬといふ不便があつたが、現在は主管一同常に一室に相會してゐるから、尋常科生徒の學習及操行等に就き隨時極めて容易に意見の交換を爲すことができる。

教授上の諸施設 本校に於ける教授上の施設は尋常科と高等科とに對し別個に之を行ふことを主眼として居る

(A) 尋常科

博物講義室 同研究室(標本室を兼ね、標本中は菊地教諭の蒐集に係る富山灣生物標本は甚だ整備し、特に貝類、魚類、甲殻類が多い) 物理化學講義室、實驗室、研究室(器械室及び藥品室を兼ね) エア瓦斯發生室

第一、第二地歴講義室 同標本室 研究室 圖書教室 同研究室 音樂教室

(B) 高等科

博物學講義室 (幻燈の設備あり) 生物學實驗室 標本室

植物學研究室 動物學研究室 溫室

地質礦物學標本室 (今村教授の蒐集に依る富山縣産化石標本室を異色とする) 研究室 (薄片製造機械を設備す)

物理學講義室 同實驗室(七) 機械室 研究室(二) 蓄電池室(變壓器の備附あり。二二〇ボルトの電流をこれによつて百ボルトに直し、關係教室に送る。蓄電池よりは百十ボルトまでの直流を取り得) 工作室(機械室備附の主要なる機械は、X光線發生裝置、波長分光計、水晶スペクトログラフ・アツベの屈折計、紫外線應用物質鑑識器)

化學講義室 同實驗室機械室 準備室

硫化水素室 藥品庫 エア瓦斯發生室

圖學講義室(製圖室を兼ね) 同研究室(尋常科兼用)

地歴講義室（幻燈設備） 地歴製圖室 標本室及び研究室（尋常科兼用）

雨雪天教練體操場 銃器庫 銃器手入室

劍道場（有備堂ニ稱す） 柔道場、

（武道場は元、特に獨立せる武徳殿式の建物を造り、其處で劍道、柔道を行つてゐたが、場所の狹隘なる爲め分離することに至つた） 弓道場

衛生設備 本校は職員生徒の健康状態に注意を拂ひ、昭和六年度より毎週水曜日の放課後に校醫及び藥劑師の出張を求め、寮務課室で希望の職員生徒をして診療を受けしめ、寮務課藥局に於て調劑し、診察投藥も校費を以て辨じてゐる。尙この外に、本館の一部に休養室を設け應急處置に必要な設備と藥品を用意してある。

留學及研究獎勵の制度

外國留學 學校創立の當初、馬場家より寄附されたる拾萬圓の外國留學基金を本とし、大体文部省の規定に準じて制定されたる在外研究員規定に従ひ、教官中より研究員を指定し、海外に派遣することにして居る。大正十五年以來之を實施し、既に七名はこれを終り、一名は目下留學中にある。

内地留學 昭和四年内地研究員規定を定め、縣費を以て、大學其他適當の場所につき、教官をして專攻學科の研究に従事せしめることゝなつて居る。本規定により昭和六年以來、毎年數名宛の内地研究員が、指名されて來

た。普通に、内地留學の期間は、二ヶ月間（主として休暇利用）であるが、外學留學を命ぜられたる者本人の希望により、又は學校長の命により長期（一年以内）の内地留學をなし得るこゝとなり、昭和十年度に其新例を開いた。

研究獎勵費 昭和十年度より通常豫算に於て、研究獎勵費が計上されるこゝとなつた。學校長は獎勵費下附出願の教官中、數名を指定し、これに各々年額約百圓を支給し、各自の專攻學科に對する特殊研究の補助たらしめ、教官の研究を獎勵して居る。

圖 書 館

本校の圖書館は現在、事務室、職員閱覽室、生徒閱覽室、圖書目錄カード、新聞閱覽室及書庫から成つてゐる。書庫は鐵筋コンクリート三階で、各階共十二坪である。

職員に對する圖書の貸出については、本校の教官室が各學科別の研究室に分れてゐるので、各學科に平素必要なる辭書、叢書（共同使用の）類は各研究室に備付けて置くが毎年七月十日より二十日までの間に必ず圖書課へ返納する定めである。教職員に對しては同時借出の冊數に若干の制度を加へて短期（一年間）及び長期（二年間の）貸出をしてゐるそしてそれ等の借受を繼續するに否に拘らず、毎年六月二十日より同三十日の間に返納するものである、生徒の圖書利用については漸次なるべく簡便な手續に改め、昭和四年五月から、圖書の館外持出しを

許すことゝし、期間は一週間、冊数は一冊を定めた。春期、夏期、冬期の休暇には二冊を限り館外持出を許す。辭典類の自由閲覧は、嘗て試験的に行つたことがあるが、現在はこれを行はない。

本校の藏書数は昭和十一年三月末現在では、洋書五、六五二冊、和書一六、一〇二冊、合計二一、七五四冊に達してゐる。但しこの中には、昭和三年寄贈の故南日校長の藏書の一部から成る南日文庫の四一五冊昭和八年寄贈の故宇田教諭の藏書から成る宇田文庫の一四六冊、同年六月寄贈の故小坂助手の藏書から成る小坂文庫の一四〇冊及び昭和十一年一月寄贈による故川勝教授の藏書から成る川勝文庫の九八〇冊が含まれてゐる。

ヘルン文庫

八雲圖書館に所藏するヘルン文庫は、本校の開校を祝して、大正十三年六月十日、馬場はる子女史より寄贈せられたもので、本校の有する最も大きな誇りの一つである。本文庫生前の所藏者たるラフカディオ・ヘルンは世界的な文豪であつて、我國に歸化の後小泉八雲を稱し、東京帝國大學、早稻田大學等に英文學を講じ、一方その麗筆を以て本邦文化の眞體を世界に紹介した我國の恩人で、歿後從四位を贈られた。洋書二千七十一冊、和漢書三百七十六冊より成る本文庫は、故人の遺品又文獻として珍重すべきものたるは勿論、就中ヘルンが晩年心血を凝いだ傑作「神國日本」の手書稿一部一千二百枚の如きは、皇室の御慶事を創設の由緒とする本校にとつては實に秘寶とすべきものである。

青 冥 寮

青冥寮は高等科生徒の收容を本体としてゐる其の開寮は大正十五年九月一日で、本校創立の第三周年目に當つて居る。場所は本校の西南隅にあつて、窓を開けば剣を初め北日本アルプスの雄峰や神江の流れが一目に見渡され、丘から見下す青田のすがすがしさ！ 讀書思索に耽る夜の静寂を破つて千里寄せ來る潮の音がごころご耳底を搔つて行く。

在寮生徒に對する監督及び事務は寮務課に於て之を行ふのであるが、一方寮生は校長の認可を得たる「規約」により、秩序、整頓、風紀、衛生、非常警備、炊事其他寮生活遂行上必要なる事項に關する規定を設け互選した委員の統制により規約を實行してゐる。かゝる寄宿舎の設備について記すに、舎室の生徒收容力は百五十七名であるが、最も適當と見做すべき收容數は八十名乃至九十名であり、多くの場合在寮生徒數は此の適度(理想的)收容數と一致してゐる。

尙この外に、食堂、浴場、藥局等附屬し、共濟組合が生徒日用品及飲食物を販賣せるホールは廊下を以て連絡し、寮生の日常生活に必要な諸施設は一應完備せるのみならず、冬季煖房の設備は他に類の少ない施設である。其の他娯樂設備としては、寮生自治費により、ラヂオ、蓄音器、碁、將棋、ピンポン等を有つてゐる。

三、教授訓育上の実施要項

教授上の実施事項

本校に於ける教授上の実施事項につき、其の特殊なるものを掲載する

一、尋常科に於ては体操教練の外、正科として武道を課し、柔道、剣道の内其の一つを選んで履修せしめ、高等科にありては昭和八年度より第一學年に武道を課し、柔道、剣道、弓道、の内、其の一を必修せしめてゐる。

一、武道寒稽古 毎年一月、約二週間、放課後之を實施す。

一、教練野外演習

イ、高徒科生徒は毎月五月下旬、立野ヶ原陸軍演習地に赴き、三泊又は四泊の上、各種の教練を行ふ。別に實包射撃を施す

ロ、尋常科三、四年生は毎年十月、富山歩兵第三十五聯隊兵營に四泊の上、軍事教練を行ふと共に、兵營生活の体験を得せしめ、宿泊中實包射撃をなす。

ハ、尋常科一、二年生は富山市附近に於て毎學期一泊又は二泊の野外演習を行ふ。

一、夏期特別授業 第一期試験後一週間、尋常科生徒全部に對し、午前約二時間授業を行ひたる後、東岩瀬海岸に於て水泳の練習をなす。

一、修學旅行 尋常科第三學年終了生は春季休業中、日程約十日間、關西及び九州地方の修學旅行を實施す。

一、博物採集

イ、高等科理科三年生に對し、夏季休業中、動植物教官指導の下に石川縣和倉海岸にて一泊三日間に亘り生物學臨海實習を行ふ。

ロ、尋常科一、二年生に對し毎年數回、休日を利用し、縣内の適當なる地において植物採集、昆虫採集を行ひ尋常科四年生に對しては、同様にして礦物採集を施行す

附 高等科編入のこゝろ

本校尋常科修了生の高等科編入については、學則の定むるところにより、尋常科修了者は他の中等學校よりの志願者に先んじて入學せしむるのであるが、從來の經驗に鑑み、相應の統制を行ふ必要が生じた。乃ち尋常科時代を通じ教官は各生徒が將來、高等科の何科に適するかについて特に注意を拂ひ、尋常科四年生に對しては新學年の始めに當り、高等科の志願科類を選擇せしめ、毎年六月、父兄會を開催して、生徒の志願の適否等について父兄と懇談し、本人に適當なる科類を選定せしめる。十一月志望科類の最後の決定を行ひ、爾後は生徒の志望に應じて必要なる學科目に就いて、特に指導を與へ高等科進入の準備をなさしめてゐる。而して此の志願科類の決定により他の中等學校より高等科に入學せしむべき各科類の人員を決定し十二月生徒募集を行ふのである

訓育上の實施事項

本校に於ける訓育上及び之に關聯して必要と認むる特別なる實施事項の概要は次の通りである。

(一) 尋常科

- (イ) 朝禮 尋常科關係生徒全部が毎日始業前五分に、運動場又は生徒控所に集合し、朝會、敬禮、深呼吸を行ひ、また隨時告諭、指示等をなし、特に月曜日には國旗掲揚式を行ふ
- (ロ) 默想 始業のサイレンと共に生徒は教室に入り、教官の來場まで默想を行ひて氣分を沈靜にし、以て專心學習に従事する態度を養はしむ
- (ハ) 運動デー 尋常科一、二、三年の生徒には毎週運動デーを設け、一時間宛各學級主管自ら之を指揮して体育の向上を圖るに共にクラスの融和を助成し、且つ生徒の個性を知るに便ならしむ
- (ニ) 合同体操 毎週土曜日の第五時限に尋常科合同体操を施行し、団体訓練を行ひ且つ校友會各部の運動競技を指導す

(二) 高等科

- (イ) 宣誓式 高等科に於いては特に尋常科よりの編入生及び外部よりの新入生に對し、入學當初に、編入及び入學の宣誓式を行ふ。其の際は校長、教頭、生徒主事、學級主管列席の上、各個に宣誓文を朗讀して自署せしむ

(ロ) 訓話

右の新入生に對し、宣誓式後適當の日に生徒主事より、本校高等科生としての心得を微細に説明し、且つ七年制高等學校に於ける高等科生の立場、尋常科又は他の中等學校と高等學校高等科の相違、本校の訓育方針、高等學校生徒としての教養等につき懇篤なる諸注意を與へ、又、近時學生々徒思想運動の激成と共に、有爲なる青年の前途を誤るもの多きに鑑み、第一學年の第一學期中に思想運動並に其の宣傳獲得の状況を概説して、生徒の過誤に陥ることのなきやう訓話するを例とす

(三) 精皆勤賞 生徒をして學校生活に對する眞摯なる態度、努力勉勵の習慣を涵養せしめんがために昭和六年度以來精勤賞及び皆勤賞制度を設け、次の如き規定の下に賞狀及び賞品を與へてゐる

「高等科にありては參ヶ年を通じて缺席日數五日未満、尋常科にては四ヶ年を通じて缺席日數四日未満の者を精勤とし遅刻及び缺課は貳回を以て缺席壹日に換算す一ヶ年皆勤者、尋常科四ヶ年を通じて皆勤若くは精勤せる者、及び尋常科、高等科を通じて皆勤若くは精勤せる者は學年末に賞狀を授與す」

四、教育方針

教授の方針

高等學校は高等普通教育の完成を目的とするが故に、その間的修養の指標は、將來國家社會の各方面に於け

る指導者としての智能の涵養にある。高等學校に於て教授する學科内容は、實社會に立つて或る目的の必要なる専門的學術ではない。故に本校では、學習上各學科に就き輕重を設けず均等なる教養を授くるを方針としてゐる。學習の効果を擧ぐるには教官の指導その宜しきを得ねばならぬことは勿論であるが、それと共に各自生徒の自發的好學心の旺盛なる心境を助成することが最も必要なことである。本校に於ては此の點につきても特に多大の注意を拂ひ、生徒各自の性情を察知し、各種の眞面目なる研究會設立を獎勵し、以て生徒各自が正しく、高き理想を持し人格の修養を相俟つて、常に學修の一路に邁進せんことを期してゐる。

尋常科の學習に關しては、最深な注意の下に授業を行ひ、生徒各自の智能を啓發すること共に、常に生徒の好學心を誘致し、且つ勤勉を勞苦に堪へしむる態度を養ふを主眼としてゐる。特に高等科へ進入に際し選抜試験を行はざる爲めに、高等科進入後に必要なる科目については充分なる學習をなさしめ、その指導は速成主義を排し専ら根柢を培ひ、將來に於ける學力の暢達を期してゐる。

本校は高等科に於て、尋常科修了者と共に一般中等學校出身の志望者をも收容してゐるから之等兩種の生徒群の間に多少、學習の程度及び研究の態度を異にすることがあり、爲めに學科指導上不便な點も感じないでもないが本校に於ては之等中等學校出身者、尋常科出身者につき、諸種の點特に性行及び學業成績を比較研究し、尋常科に於ける教授訓育の參考とすると共に、高等科に於ける指導方法の改善に努めてゐる。故に、學校當事者の指導宜しきを得れば之等生徒は相互に切磋し、長短相補ひ、以て自學自習の美しい校風を有する學園たらしむるを得るものと信じ、特に此の點に最善の努力を爲しつゝあるのである。

訓育の方針

本校訓育の根本精神は生徒心得大綱に指示せられてゐる。左に其の全文を掲載する。

生徒心得大綱

第一條 本校生徒タルモノハ常ニ教育勅語ノ御趣旨ヲ奉戴シ、高等普通教育ノ完成ト國民道德ノ充實トヲ期ス

ル本校ノ目的ニ副ハンコトヲ力メ畏クモ 今上陛下ノ御成婚奉祝記念事業トシテ創設セラレタル本校ノ

由緒ヲシテ益々光輝ヲ發揚センコトヲ心懸クベシ

第二條 前條ノ趣意ニヨリ日常修養ノ心得トシテ特ニ左ノ三項ヲ標示ス

一、進取 因循退嬰ハ青年ノ事ニ非ス智徳ヲ研キ体力ヲ練ルニ當ツテ常ニ勇猛進取ノ氣象ヲ振ハザルベカラス

二、反省 人ニ求ムルコト急ニシテ自ラ、修ムルニ緩ナルハ社會百般ノ病根タリ將來ノ國家ヲ擔フ者反省自責

ノ工夫ヲ怠ルベカラズ

三、協調 學校モ亦一ノ社會ナリ獨善利己ヲ戒メテ協調共鳴ヲ圖リ以テ學生々活ノ内容ヲ純潔豊潤ナラシメサ

ルベカラズ

右第二條に掲げる「進取、反省、協調は」は、初代校長南日恒太郎氏が高邁深達なる人格的思索に因り本校生徒教養上、特に高唱力説せられたる徳目であつて、永久に本校生徒が服膺勵精すべき指標である。

本校は此の點を特に重んじ、「進取、反省、協調」の精神の涵養を期するは勿論、又社會の上位に立ちて指導者たるべき生徒の有爲なる將來を思ひ、生徒が高邁なる精神と潤達の氣宇を以て、美しく、正しく、強き陶冶の上に自己の人格を築くことを期してゐるのである。高等學校は専門學校と略々同年輩の生徒を養成するが、將來生徒の向ふ所は、社會百般の方面に亘るのである。生徒は自らの好尚と、自己の性向に適應する夫々の進路を選び、以つて人格の完成と專攻學科の究明を企てねばならぬ。故に生徒各自の個性並に天分を正しく伸暢せしむることは本校訓育教養上の眼目とするところである。又學校が、寄附舎訓育の方針、寮生活の本領として垂示せる大綱は「本校教育の趣旨を体し、和衷共同以て心身の練磨に努むること」である。然し學校はかかる精神の實現を單に寮務課の監督にのみ求めず、寮生の自發的精神に期待するところが多いのである。寄宿舎細則第七條により寮生として「規約」を制定せしめ、之を尊重せしむる所以も亦之に外ならぬ。固より之があるが爲めに寮務課は寮生に對する監督を等閑にするに非ざるは勿論、自治も亦一つの訓練を考ふべきであり、決して個人的な自由放縱を許すことを意味するのではない。可及的に寮生の自發的精神を以て學校の訓育の目的に添はしめ、自覺的共同生活を遂行せしめんとする意圖を出でないのである。故に局に當るものは「規約」による寮生の自治的機能を發揚せしめつゝ寄宿舎生徒の指導誘掖に當つてゐる。

最後に生徒の現状に就いて觀るに、近時其の健康状態は著しく良好であつて、且つ精神的自覺により攻學の風日に揚り、出席状態は近年になき良成績を示してゐる。一般生徒は冷靜に各自の目的に向つて孜孜として勉學修養につめてゐる。思想的にも矯激な所なく、穩健中正の態度を執り、我が學園の美しき建設と、校風發揚の爲め

に、青年の殉情的態度を以て眞面目に努力しつゝ、我が學園の大理想とする「進取、反省、協調」の精神を信條として、只管、智徳の涵養を怠らないのは誠に喜ぶべき現象である

五、職員

學校長

教授

獨語 教授
獨語 教務課長

獨語 文二、乙主管

兼 教 諭

歷史

制圖・力學 會計課長

兼 教 諭

地理

兼 教 諭

英語

文一、甲主管

兼 教 諭

西洋史

庶務課長

兼 教 授

國語

生徒主事
生徒課長
寮務課長
(代理)

兼 教 諭

修身・論理
哲學・概說

兼 教 諭

物理・自科

在外研究中

蜷川龍夫 富山

成田秀三 青森

藤森秀夫 長野

上野菊爾 佐賀

高橋順一 廣島

石井逸太郎 熊本

高田力 北海道

岡本基愛媛

小林正治 新潟

德光八郎 石川

高崎完識 島根

助教授兼教諭

歴史 生徒主事補

体操

圖畫

教諭

兼助教授

博物

尋常科主任

尋三、A 主管

菊池 勤 左衛門 新 潟

兼助教授

數學

生徒課

尋四、A 主管

安藤 敏 郎 岐 阜

同

英語・獨語

寮務課

平岡 伴 一 東 京

兼教授

漢文

寮務課

内山 數 雄 新 潟

兼教授

國語

寮務課

下斗 米 展 岩 手

兼助教授

物理

寮務課

尋二、A 主管

古屋 利 之 石 川

兼助教授

柔道

寮務課

尋三、B 主管

長久 繁 松 富 山

兼助教授

劍道

寮務課

萩野 啓 之 助 富 山

兼助教授

化學・自科

生徒課

尋四、B 主管

小河 西 清 正 富 山

兼助教授

數學

寮務課

尋一、A 主管

山川 末 吉 新 潟

兼助教授

河野 知 春 大 分

山川 末 吉 新 潟

弓 作 音 英 獨 英 物 國 教 英 國 英 教
 道 業 樂 語 語 語 理 語 講 練 語 語 語 練
 師 助 教 授 心 得

尋二、B 主管
 尋一、主管

才 結 荒 ヒー アル 大 林 馬 佐 守 木 西 浦
 記 城 木 ル フ オ 山 林 瀨 野 屋 侯 本 田
 清 守 得 ノー ミ グ ダ レ ク 辨 浩 晋 繁 獅 修 茂 常
 重 郎 三 マ ン ク 靜 富 富 松 郎 二 樹 郎
 富 富 東 加 獨 靜 富 富 富 京 滋 岡 富
 山 山 京 奈 逸 岡 山 山 山 都 賀 山 山

配屬將校

教 練 陸軍歩兵中佐

學 校 醫

內 科

內 科

齒 科

齒 科

囑 託 醫

耳 鼻 咽 喉 科

眼 科

書 記

主 任

主 任

庶 務 課
教 務 課
圖 書 課
會 計 課
庶 務 課

板 津 直 剛 富 山

加 藤 宗 哉 富 山

直 江 一 良 富 山

坪 田 忠 一 富 山

金 森 保 芳 富 山

長 澤 安 弘 山

島 權 次 郎 山

二 木 勝 邦 富 山

瀧 山 勳 富 山

城 石 孝 昌 富 山

高 田 義 正 富 山

上 田 兼 正 富 山

書記補

會計課

圖書課

生徒課

生徒課

教務課

教務課

機關室

會計課

電話交換室

兼寮務課

雇員

兼寮務課

助手

動植物地質學教室

博物物理化學教室

化學教室

物理學教室

動植物地質學教室

川原吉石

桑原美次郎

山田松次郎

石倉太郎

藤井兼二

明官兵次郎

大浦利次郎

岡崎ミサ才

安部武雄

碓井正一

柳澤敏夫

森井喜一

高橋德治

〃

〃

六、生 徒

生 徒 數

(四月十日現在)

三八

尋 常 科		高 等 科		合 計	
第一學年	八〇	第一學年	六四	第三學年	三六八
第二學年	七九	第二學年	六二	合 計	六七八
第三學年	八〇	文 科	六二	理 科	
第四學年	七一	計	一二六	計	
合 計	三一〇	文 科	五四	理 科	
		計	六五	計	
		合 計	一一九		
		總 計			

生 徒 學 歷 別 調

(昭和十一年四月十日現在)

尋 常 科		高 等 科		合 計	
小 學	二八九	本校尋常	六六	中學	一七八
六 年 卒 業 校		了	一四〇	了	一九〇
		修 中 學	二〇六	了	三六八
		四 年		了	
		卒 中 學	一八	業 校	
		其 他	一四四	其 他	
		合 計	四八	合 計	

生 徒 本 籍 府 縣 別 表

(四月十日現在)

府 縣 別	文 科		理 科		尋 常 科		計
	一 年	二 年	一 年	二 年	一 年	二 年	
北 海 道	一	一			一	一	七

福	富	石	長	愛	茨	三	群	新	德	熊	青	大	兵	東
島	山	川	野	知	城	重	馬	潟	島	本	森	分	庫	京
一	三八		一	一			一							二
	二七	二	三	二		三		一				二		一
	三七	一				二		一					一	四
一	五二			一				一		一				一
	四五	一	一		一	一		一					一	
	四四	一	一		一	一			一				二	一
	六四	二	一			二								三
	六五	一						二					一	
二	六五	一						二						三
	五七	三						四						
四	四九三	一一	七	四	二	九	一	一一	一	一	〇	二	五	一五

崎 玉	大 阪	樺 太	山 口	奈 良	島 根	神 奈 川	枋 木	朝 鮮	鹿 兒 島	山 形	岐 阜	靜 岡	福 井	和 歌 山
	二			一	一		一	一		二		一		二
	二		二	一							一	二	二	一
			一				一				一		一	一
	一			一										二
								一					三	一
											一		四	一
			一								一			
				一					一	一			一	一
			二				一						二	
											三			一
○	五	○	六	四	一	○	三	二	一	三	七	三	一三	一○

長	島	香	廣	秋	滋	佐	宮	愛	千	山	京	岡	福	宮
崎	取	川	島	田	賀	賀	崎	媛	葉	梨	都	山	岡	城
					一			一				一		
一			一					一	一	一	三	一	一	一
				一										
		一								一				一
				一	一						一	一	二	
一				一	一		一		一		一			一
		二			一				一				一	一
						一	一					一		一
									一					
						一					一			一
二	〇	三	一	三	四	二	二	二	四	二	六	四	四	六

東 北 大	京 大						東 大							
	醫 學	農 學	理 學	工 學	文 學	經 濟	法 學	醫 學	農 學	理 學	工 學	文 學	經 濟	法 學
二		一	二	一	三	六	一二	二			一	三	三	一
三		二	三	二	七	二	一三	二	四		二	二	五	三
一		一	二	二	五	六	一四	二	一		二	五	二	二
七	二	三	五	四	八	一三	一二	二	六	二	五	一〇	一	七
四				五	七	五	一六	七	五		五	五	八	四
一	一	四		四	一〇	七	二二		五		二	六	五	五
五	一	三	一	四	八	四	一六	一	七	二	三	九	五	九
二	六	二	三	二	五	一〇	七	一	七		一	一〇	三	八
四	四	四	二	六	六	一〇	一三	一	一	二		一七	六	一〇

大阪大			臺北大			北海大			九州大				東北大		
醫學	工學	理學	理農	文政	農學	理學	工學	醫學	農學	工學	法文學	醫學	理學	工學	
								一	四	四			一		
				一		二	一				一	一	一		
一			一	三		二	一	一	三	二	一		三		
一	二		一	二	一				一		一		四	二	
	六				一				二	二			二	二	
一	一					二	三				一				
二	二				一		一			二	一	二		一	
	一	一				一	一			二			二		
二	二													一	

滿洲醫大	東京工業大	京城醫大	熊本醫大	日本醫大	慈惠醫大	慶應大醫科	名古屋醫大	長崎醫大	千葉醫大	岡山醫大	新潟醫大	金澤醫大	神戸商大
						一		一	一	一	三	三	
				一			一			一	二	九	二
							一	一			二	六	一
					一		二	一		一	三	三	二
	一	一	二		一			二			一	一八	三
一	二		五									六	一
							一	一		一	一	一三	一
	一							一		一		一〇	
												一二	一

八、經 費 自 大 正 十 二 年 度 至 昭 和 十 年 度 決 算 額

支 出 額	大 正 十 二 年 度	大 正 十 三 年 度	大 正 十 四 年 度	大 正 十 五 年 度	昭 和 二 年 度	昭 和 三 年 度	昭 和 四 年 度	昭 和 五 年 度	昭 和 六 年 度	昭 和 七 年 度	昭 和 八 年 度	昭 和 九 年 度	昭 和 十 年 度	
俸 給	二、三六四	一、六四六	一、九八五	六、三五五	七、七八七	八、五五五	九、四七五	九、六七九	九、八九一	九、八九九	六、〇二二	九、八四三	九、八六五	
雜 給	一、五二〇	六、九九九	一、五、九四四	一、七、三六六	三、〇七三	三、七〇八	三、五八二	五、一、九九	二、七五六	一、九、九三九	一、九、四〇〇	一、八、五六七	二、三、四五七	
校 費	六、〇	二、〇四五	四、〇六一	六、〇〇〇	三、五三三	二、四、三七三	二、〇、九四五	一、九、四〇一	二、六、六三二	一、五、四九五	一、六、〇四二	一、四、三七三	一、六、五三〇	
寄 宿 舍 費	—	—	—	一、一、九一	二、一、三三	二、二、八三	二、四、三五	二、四、四四	二、三、〇五	二、二、六九九	二、二、七九九	一、八、九七七	一、九、一七七	豫算外
國 庫 納 金	二〇	一、六四	四〇六	六、四五	七、八七七	八、六八	九、五八	九、七九	九、二四	九、三	八、八四	—	—	
修 繕 費	一〇〇	二〇〇	二、四八	三〇一	九、九九	一、二、七	一、七、五	一、九、二	一、六、七	一、四、三	七、六七	六、七〇	七、〇七	豫算外
學 事 諸 費	—	—	五、三〇	七、五	八、五三	八、七	七、〇一	七、四四	七、三〇	一、〇、六	一、五、三六	五、八五	七、二	豫算外
設 立 費	三、一五九	三、五八	三、一、〇〇	四、一、四八	四、四、四二	—	—	—	—	—	—	—	—	
計	七、八四四	四、八、三六七	九、三、〇、九四四	三、一、二、〇〇	一、七、一、八四一	一、五、〇、八五〇	一、五、四、五三三	一、五、四、四二七	一、四、三、四一四	一、四、〇、四三二	一、三、六、八七二	一、三、三、九三三	一、四、二、一八七	

九、敷地並校舍

一金六拾九萬六千六百參拾圓

工費總額

內譯

種別	建坪數	延坪	工費	摘要
敷地				
本館教室	五七三、〇〇〇	一七、四五〇、〇〇 ^坪	五三、五三〇、〇〇〇 ^円	內運動場九千餘坪
特別教室	四七四、〇〇〇	一、一三五、〇〇〇	六四、一五三、〇〇〇	木造二階建玄關ハ平屋建
書庫	一五、〇〇〇	四七四、〇〇〇	七七、三〇〇、〇〇〇	木造平屋建
圖書館	一七二、五〇〇	四五、〇〇〇	二〇、〇〇〇、〇〇〇	鐵筋混凝土三階建木造平屋建
八雲圖書館	二五、六七	一七二、五〇〇	三一、三七八、〇〇〇	木造平屋建
生徒控所	一四四、〇〇〇	二五、六七	七、一〇〇、〇〇〇	鐵筋混凝土平屋建
柔劍道場	七〇、〇〇〇	一四四、〇〇〇	二四、三五〇、〇〇〇	木造二棟分
全器具室	三〇、〇〇〇	七〇、〇〇〇	一九、八〇〇、〇〇〇	木造平屋建
寄宿寮	三三三、五〇〇	二〇、〇〇〇	二、六〇〇、〇〇〇	全
		四四六、〇〇〇	四八、七五〇、〇〇〇	木造二階建

